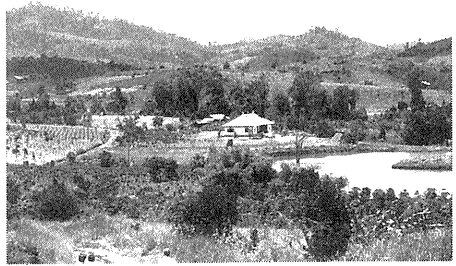


- 民族のこころ (117) -

党員も経営する

栗原浩英



ベトナムは世界で最も百万長者が多い国だといわれる。何しろ1ドル=1万ドンという状況だから。それはさておき、億万長者となるとそうはいない。私の敬愛する友人レ・ミン・ゴックさんはそうした数少ない億万長者の一人だ。誰しもなぜ私の如き人間にそんな友人がいるのかと疑念を抱くことであろう。それにはゴックさんの本業がホーチミン市社会科学院の연구원であると説明すれば十分だと思う。

私がゴックさんと知り合ったのは1990年の秋、モスクワで開かれた国際会議の席上だった。ロシア語と中国語を自由に操り、堂々とした風格をそなえたゴックさんは私に強烈な印象を残した。それが縁で、ホーチミン市を訪れる度にゴックさんの所にお邪魔するようになり、現在に至っている。ところでゴックさんは今や本業よりも、本来副業であったはずの経営の方で有名だ。「自分のことは自分でやれ」というドイモイの時代になってから、サトウキビの屑から酵母を作る秘法を知っていたことから、これがホーチミン市のパン屋に売れに売れて大当たりした。ゴックさんは現在、郊外の大邸宅付近に飲料や酵母を生産する工場を経営し、さらにバオロック、ドンナイ、ウンタウに総面積640ヘクタールに及ぶ農園を所有する。そのもとで140名に上る人々が働いている。ゴックさんの年収は25億~30億ドン(2500万~3000万円)になるというから、大変なものである。

このように多角経営で成功したゴックさんだが、れっきとしたベトナム共産党員でもある。1937年フエ生まれのゴックさんは早くからホー・チ・ミンの政権に従う道を選択し、1952年から59年まで北京に留学、中国文学とロシア文学を学んだ経歴をもつ。ベトナムでドイモイが始まってから、党員は経営すべきか否かという問題が提起され明確な結論の出ないまま今日に至っているが、ゴックさんの立場は明快だ。「自分は多くの人々の生活を保障している。こんなことが合作社にできたらどうか」というのである。そして、堂々と経営を行う背景には「ベトナムが集団主義の時代に後戻りすることは絶対ない」というゴックさんの強い信念がある。避暑地として有名なダラットに近いバオロックにあるゴックさんの農園を見ればこのことがよくわかる。ここはゴックさんが1990年、新経済区の経営に失敗した農業合作社から1ヘクタールあたり5000ドン(約50円)という値段で、40ヘクタールの土地を購入したのが始まりだ。その後ゴックさんは資本を投下、元合作社農民とともに荒れ果てた土地を茶の緑も鮮やかな一大農園へと変えたのである(写真はその農園とゴックさんの別荘)。

ゴックさんは大変な資産家ではあるが、そのスタイルは刻苦奮闘し、自らの努力と試行錯誤を通じて富を築くところにあり、安易な金儲けは決してしない。昨年お会いした時には新たに豆乳とナタデココの製造と販売に着手していた。これも自らの研究と技術導入の成果である。新製品販売後も、製品に関して消費者からクレームがつけば直ちに改善に乗り出す。それにゴックさんは懐が広い。郷里のフエの画家たちがホーチミン市で絵画展を開くのを後援したり、バオロックの農園に学校や病院も建設したりしている。

いつもフエと一緒にいこうと誘われる。ドイモイの実際を知るうえでそれがどんなに勉強になるかはわかりきっているのだが、「夢」はしばらくとっておくことも必要だろう。そうでないとベトナムへ行く理由もなくなってしまうから。